

## 双林寺の画僧月峰のこと : 田能村竹田・頼山陽関連 資料より探る

田邊, 菜穂子  
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/10292>

---

出版情報 : 語文研究. 103, pp.19-35, 2007-06-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 双林寺の画僧月峰のこと

— 田能村竹田・頼山陽関連資料より探る —

田 邊 菜穂子

京都東山にある双林寺は、西行ゆかりの寺である。西行を慕う人々が集う場所であるこの寺は、例えば支考が芭蕉の三回忌法要を執り行つて後、支麦系俳家の交流の場となるなど、俳諧史上でも度々注目された。また、双林寺は、桜の名所としても知られ、豊臣秀吉も当寺に閑遊したと伝わる。山号は金玉山。最澄を開祖とした天台宗の寺であるが、一時期類廃。至徳年間（一三八四—一三八七）、国阿上人によつて再興され、明治初年までは時宗国阿派の本山であつた。本尊は重要文化財の薬師如来坐像。明治初年、名勝地の公園化計画にあたり、寺域が円山公園に指定され、現在では本堂を残すのみとなつている。

この寺の三十四世住職が月峰である。画人として知られる月峰の作品は、『京城画苑』（文化十一年（一八一四）刊）な

どの画譜や、百名を超える当時の著名な画家が絵を挿した『古方藥品考』（天保十三年（一八四二）刊）などに収められている。その他、俳書や俳諧一枚摺りにも多くその名を見ることができ、<sup>注2</sup>彼が画事に加え俳諧も能くしたからであろう。月峰は、同時代の俳書に頻繁に句を寄せているのみならず、二条邸にて行われた俳諧興行、いわゆる二条家俳諧にも寛政二年より度々出席して<sup>注3</sup>いる。また、画僧として活躍し、俳事に遊んだ月峰は、実に多くの文人と深交を結んでおり、彼の名前はこの時代の様々な資料に散見される。それは月峰の持つ多角的な魅力と、当時の京都東山、また双林寺という環境の利点の相乗効果によるものであつたと考える。従来、池大雅の研究において一面的に触れられることしかなかった月峰について、本稿では、関係資料、とりわけ田能村竹田と

頼山陽の書簡を用い、その交流から確認される月峰の晩年の活動とその意義を明らかにしたい。

## 一、月峰について

まずは、月峰の伝記的事項を整理しておきたい。辞書の類に項を立てられるのは、主として画人として扱われる場合に限られ、それも最も詳しいのが昭和十二年に刊行された『新撰大人名辞典』(平凡社、現在『日本人名大辞典』として復刊)という、いささか古いものであるが、ここに引く。

月峰 徳川中期の画僧。大雅堂三世。宝暦十年生る。名は辰亮。また、菊潤と号す。京都東山双林寺三十四世の僧で長喜庵に住す。若年から画を池大雅に学んで、よくその法を恪守し、またよく大雅の鑑定をした。のち餘夙夜に嗣いで大雅堂三世となり、天保十年十一月九日没、年八十。長子義亮業を継ぎ、来青軒と号す。肖像画に長じ、頼山陽の像を描いた。元治二年二月二十一日没。次子清亮が大雅堂四世となる。明治二年十二月十九日没、年六十三。その子定亮が五世で、その時代に真葛ヶ原の大雅堂を廃毀してしまった。(『大人名辞典』)

この項は、月峰その人についてというよりは、大雅堂の継承者について記したものとすべきかもしれないが、ともあれ、月峰という人物に関して、これ以上に詳しいものが存在しないので、以下、この記事を確認、補強すべく、当時の資料をあたってみる。

はじめに見るのは『平安人物志』である。月峰の在世中に発行された『平安人物志』は、明和五年(一七六八・九歳)、安永四年(一七七五・一六歳)、天明二年(一七八二・二三歳)、文化十年(一八一三・五四歳)、文政五年(一八一三・六三歳)、文政十三年(天保元年、一八二九・七〇歳)、天保九年(一八三八・七九歳)の七版。そのうち、月峰が掲載されたのは、文化十年、月峰五四歳の時に上梓されたものから、没する前年、天保九年に刊行されたものまでの、四版である。考えてみても、文化十年より前に刊行されたものについては、月峰が掲載されるにはその年が若すぎる。明和五年版には、月峰の画における師匠である池大雅とその妻玉瀾、安永四年も同じく大雅と玉瀾、そして翌年に大雅は没し、天明二年版では玉瀾と兄弟子にあたる青木夙夜が掲載される。玉瀾は天明四年に、夙夜は享和二年にこの世を去り、その後刊行された『平安人物志』に月峰が掲載される、というふうだから、年齢も熟して、その技量も確かなものとなって掲載に至った

と考えてよからう。

さて、『平安人物志』の掲載内容は、次の通り。

文化十年 五四歳

「画」 〔積辰亮 菊澗 東山双林寺 月峯〕

文政五年 六三歳

「文人画」 〔積辰亮 菊澗 東山双林寺 月峯〕

文政一三年 七〇歳

「篆刻」 〔積月峯 再出 在中巻〕

「文人画」 〔積辰亮 菊澗 東山双林寺 月峯 山水〕

天保九年 七九歳

「篆刻」 〔積月峯 出画部〕

「文人画」 〔積辰亮 月峯 双林寺金量院〕

月峯は、文人画、とりわけ山水を描き、また篆刻の腕もよかつたようである。

『平安人物志』のほか、登載される人物志の類では、それほど目新しい情報を得ることはできないが、双林寺内にある月峯の墓石は、表に「双林寺三十四代ノ實阿弥陀佛」、裏面に「天保十己亥十一月九日寂」とあるそうである（『京都名家墳墓録』）。また、月峯没後の安政二年（一八五五）に刊行

された『古今墨蹟鑑定便覧 画家書家医家之部』にも同じ時が記される。

僧月峯 名八辰亮、洛東山双林寺中長喜庵主タリ。若年大雅ヲ師トシ学ヒ、晩年益進ム。天保十年十一月九日歿ス。

（安政二年刊『古今墨蹟鑑定便覧 画家書家医家之部』<sup>〔注6〕</sup>）  
『京都名家墳墓録』や『大人名辞典』では、その享年を八十歳とするが、これについてはいまだ根拠となるべき資料を見つげられない。しかしながら、ひとまず本稿では従来の説に従っておくこととし、その生年を仮に宝暦十年（一七六〇）とする。

画を得意とする月峯は様々な文人と親交があつたが、田能村竹田（安永六年（一七七七）生、天保六年（一八三五）没、五九歳）は、中でも特に深く係わつた人物の一人である。竹田の『竹田莊師友画録』（天保四年十月脱稿）巻下には、月峯について、次のように記す。

積辰亮。号月峯。双林寺有庵。曰西阿弥上人住焉。弱冠。大雅池翁仍在。居亦接近。晨夕往来。学画受其

指授。漸長。与龍草廬・皆淇園・蕉中・六如其他諸老親善。諸老亦喜其年少。才慧行敏。能会人意。亦復相愛。看花聽鳥。撰杖同遊矣。故記其嘉見偉行為多。作画。恪守池翁遺法。古朴簡疎。不阿時好。又善鑑池翁真跡。近日池翁真跡。亦海内流行。贗造偽作。紛紛錯出。至其真蹟。千無一二。故來求審定者。每日門外接武。上人一一弁証。細論涇渭矣。予寓双林寺日久。故屢寓目焉。予初東上入京。先与上人相識。爾後殆向三紀。猶嗣徽音無絶矣云。

(「竹田莊師友画録」<sup>(注7)</sup> 卷下)

双林寺の「西阿弥」という庵に月峰は住んでいたというが、「京羽三重」<sup>(注8)</sup> 卷四(貞享二年(一六八五)刊)に拠れば、「西阿弥」とは長喜庵を指す。天明三年(一七八三)成立の西村定雅の俳諧撰集「椿亭記」の中でも、月峰は西阿弥の主人で、そこは美しい庭を有していると記されている。

我、此頃、双林寺なる西阿弥の園のかたはらによもぎの軒を結ひて：(中略)：もとより阿弥のあるじ月峰子は所謂数奇人にて、家居より庭の木だち、遣り水のさき、菊の谷のながれをせき入れて、見どころ多くつくりみが、

れたれば：(天明三年「椿亭記」<sup>(注9)</sup>)

定雅が褒めた美しい庭の様子は、「都林泉名勝図会」(寛政十一年(一七九九)刊)中に「長喜庵」と題した、「菊溪」を引き入れた庭の図からも窺うことができる。

「椿亭記」のほか、寛政九年三月二十七日、清水寺で行われた新書画展観の出品目録<sup>(注10)</sup>のうちにも「墨菊 源栲亭賛 僧月峰<sup>(注11)</sup> 西阿弥寺」(8才)とある。月峰は「西阿弥」こと「長喜庵」に住んでいた。

ところで月峰は、若い時分、近所に住む池大雅の居宅にしばしば出入りし、画を学んでいたという。池大雅の住居は、明和五年の「平安人物志」によれば「智恩院袋町」、安永四年版では「祇園下河原」となっているので、確かに双林寺に近い。享保八年(一七三三)生まれの大雅と、宝暦十年(一七六〇)生まれという月峰との間には四十歳弱の年齢差があった。大雅が没するのは、安永五年(一七七六)四月十三日。その時、月峰はまだ十七歳という若さであったから、大雅に師事した期間はそれほど長くはなかったかもしれない。ともあれ、月峰は大雅晩年の弟子ということになる。<sup>(注12)</sup>

長じてからは、安永四年、近江彦根藩を致仕して以来東山に住んだ龍草廬(正徳四年(一七一四)生、寛政四年(一七

九二)没、七九歳)、僧侶である六如(享保十九年(一七三  
四)生、享和元年(一八〇一)没、六八歳)、儒家で書画に  
も造詣の深い皆川淇園(享保十九年(一七三四)生、文化四  
年(一八〇七)没、七四歳)、交友範囲の広がった大典(号  
蕉中。享保四年(一七一九)生、享和元年(一八〇一)没、  
八三歳)などといった年長者に、その才能や気配りのよさか  
ら気に入られていたとする。実際、龍草廬に例をとってみれ  
ば、先に挙げた寛政十一年刊『都林泉名勝図会』中の双林寺  
長喜庵の箇所に、龍草廬の詩「宿<sub>ニ</sub>蔡華院主月峰之住庵」が  
載る。その他、草廬の詩文集を捲つてみると、「冬日双林寺、  
集同<sub>ニ</sub>諸子<sub>ト</sub>賦」、「双林寺避暑」(『艸廬集』七編卷之二)、「双  
林寺伏枕吟」(同卷之三)、「双林寺」(同卷之三)といったよ  
うに、双林寺を題とする詩がいくつも見つかる。

大雅に学んで、その筆法を守つたということに関しては、  
文化十三年成『竹田山莊藏書画記』<sup>(注1)</sup>にも同様のことが記され、  
最後に「蓋如<sub>ニ</sub>上人<sub>一</sub>。謂<sub>ニ</sub>之善字<sub>三</sub>前人<sub>一</sub>矣。」と褒めている。  
大雅作品の真贋を見極める能力は、月峰も自負していたよう  
で、竹田に対してよく「翁真跡甚佳者・偽造甚拙者。一覽輒  
知。不<sub>レ</sub>俟<sub>ニ</sub>入言<sub>一</sub>。」と語っていたという(『山中人饒舌』<sup>(注2)</sup>)。

月峰の住居については、文化十三年序『淇園文集』に次の  
ように記す。

摹刻池無名寄興雲煙画卷跋

…及<sub>ニ</sub>玉蘭歿<sub>一</sub>其<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>蓄書画、尚盈<sub>ニ</sub>溢篋筥<sub>一</sub>門人乃相与<sub>ニ</sub>  
謀<sub>テ</sub>鬻<sub>レ</sub>之、用<sub>ニ</sub>其所<sub>レ</sub>獲之金<sub>一</sub>嘗<sub>ニ</sub>大雅堂<sub>ヲ</sub>于双林寺<sub>ノ</sub>側<sub>一</sub>  
庶<sub>クハ</sub>以得<sub>レ</sub>存<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>師<sub>ノ</sub>蹤<sub>ヲ</sub>於後世<sub>一</sub>焉及堂就<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>乃令<sub>ニ</sub>無名旧  
門人青木生居<sub>レ</sub>之。無<sub>レ</sub>幾青木歿<sub>シテ</sub>而月峯因<sub>テ</sub>遷<sub>レ</sub>自<sub>ニ</sub>双林  
西阿弥<sub>一</sub>而来居<sub>ニ</sub>大雅堂<sub>一</sub>。(『淇園文集』前編卷七)<sup>(注3)</sup>

大雅の妻である玉瀾が天明四年(一七八四)に没した後、  
門人たちは大雅の遺財である書画を売り払い、その金で双林  
寺の傍に「大雅堂」を建てた。ところが、享和二年(一八〇  
二)に京都を訪れた馬琴は、旅行記『羈旅漫録』で、大雅堂  
を酷評する。

大雅堂は、東山雙林寺中長喜庵の向ひにあり。是は七八  
年前に建し所なりとぞ。料理をして鬻ぐ。瓦には大雅堂  
の三字を篆して。家の作りも甚だ俗なれば。案に相違し  
て人に問ふに。むかしの大雅堂は祇園のかたはらにあり  
しが類焼せり。今のあるじは哥妓なるよし。空しく大雅  
堂の名をおかすといふ。いかさま家作二階等の物數寄。  
その俗なること丸山の料理茶屋におとれり。

(『羈旅漫録』<sup>(注4)</sup>)

馬琴が「長喜庵の向ひ」という大雅堂は、天明七年刊『拾遺名所図会』、文久三年『花洛名勝図会』東山之部などの挿絵では、双林寺門前の北側に描かれる。また、馬琴が聞いた話では、七、八年前、即ち寛政七年頃に建てられたということになるが、天明七年には挿絵に載っていることから考えて、玉瀾が天明四年（一七八四）に没した後、時をおかずに建立されたのではなからうか。『拾遺名所図会』には「歌仙堂」と項を立て「又の名は大雅堂といふ。双林寺境内門前の北にあり。別室に觀世音を安置す。金銅仏。長は五寸五分計也。此堂の名を歌仙堂といふは、ちかきとし、池野秋平といふ風流の人ありけり。（中略）今より十とせあまり一とせのむかしに歿せられき。其門葉、其趾を空しくせんもびんなき事とて、古へ靈山にて天哉翁長嘯子がいとなみ給ひし歌仙堂の古き柱礎など有しをかの山の坊よりもらひ、これを基とし、こゝに建て楼の上に六畳、下に六畳の筵を敷て歌仙堂の旧蹟をとゞむ。軒の瓦には、かの大雅堂といふ篆印を瓦に造りて置ける也。是なん中尾氏といふ人、其材石の用を扶て建られしとぞ。（中略）いしのつらゆ石類いしのつらゆ器長嘯子の持物也。靈山に有しを哥仙堂と共にこゝに遷す。」とある。大雅堂の別名を歌仙堂ということに関しては、文久三年刊『花洛名勝図会』東山之部の「大雅堂」の項にも『拾遺名所図会』の内容を殆どそのままに引き継いでいるものの、「歌仙堂」

といえは賀茂季鷹が享和年間に修繕を始め、文化八年に完成したものを指すことが多く、管見の限り、これらのほかに大雅堂を歌仙堂と呼んだという記述は見ない。とはいえ、長嘯子の物であったという石類器まであったというなら、全くの無関係ではないかもしれないが、「歌仙堂」という呼び方には疑問が残る。それでもその内容が指し示すものは、瓦の話などからして、馬琴のいうそれと同一である。馬琴が訪れた享和二年夏には、青木夙夜存命中であったはずであるが（夙夜は享和二年（一八〇二）十月二十三日没）、そこはもはや大雅の美績を称えるようなものではなくなっていたらしい。ともかく、夙夜の没後、月峰は西阿弥、即ち双林寺長喜庵から大雅堂に移った。

しかしながら、その大雅堂の評判はやはりいまひとつ良くないようで、文化五年（一八〇八）成立『胆大小心録』には、大雅や蕪村、芭蕉などの書画の値が急騰していることをとりあげて秋成らしく皮肉を言う箇所があるが、そこで大雅堂についてこのようにいう。

又彼先生も、双林寺の庭に大雅堂と云所が出来うとは。何やら一風にたてゝ、たんとあつた弟子衆が、蘭亭の流にて、茶室がたつたで、茶の湯はとんとしらぬ人の追善

会、ない雅堂となりました。今は塩がまの烟のきへたより、室町殿の館がやけたより、あわれになつた。

(「胆大小心録」<sup>(注)</sup>)

大雅堂は、『京都坊目誌』<sup>(注)</sup>に「其子義亮其子清亮を経て定亮の時に至り、明治三十六年公園地整理の故を以て移転せしめ。<sup>(注)</sup>地は旧址として保存せらる。大正三年元同家にありし。大雅堂の碑を此に寄附し再建す。」とある。清亮は義亮の弟。文政十三年には既に大雅堂に住んでいた。同年刊『平安人物志』文人画の項に、義亮に続いて「釈清亮 前人弟ノ居双林寺境地大雅堂」とある。天保四年の『竹田莊師友画録』をはじめ、後述する書簡の類から推察すれば、青木夙夜没(享和二年)後に大雅堂へ移つたという月峰は、大雅堂を次男である清亮に譲り、再び長喜庵に戻つたのだらう。しかしながら、天保九年『平安人物志』によれば、月峰は「金量院」、義亮は「長喜庵」、清亮は「在大雅堂」とされながらも「松泉院」と記される。長喜庵は、『花洛名勝図会』に「当寺の住持、こゝに居れり」とあるから、月峰は住持としての職務は義亮に任せ、「金量院」なる子院で晩年を過ごしたのかもしい。

## 二、月峰の交友とその人となり

この時期の様々な資料にその名が散見することから、交友範囲の広さを窺い知ることができるが、月峰は実際にはどのような人物であつたのか。先に挙げた竹田を軸に、その活動を追つてみたい。

豊後の人である田能村竹田は、儒学や画を学ぶために度々上京した。

文化二年(一八〇五)秋、詩学を成就するため、初めて上京するが、この時、竹田は月峰と出会つことになる(先述『竹田莊師友画録』巻下)。二人の交流の様子を具体的にみみると、例えば竹田の『屠赤瑣瑣録』<sup>(注)</sup>には、乙丑十月晦、すなわち、文化二年十月三十日に、僧月峰大雅堂を訪ね、そこで明和八年八月に池大雅が描いた「岳陽樓図」を見たということから(巻二)、秋成が「ない雅堂」と揶揄した文化五年には、既に月峰が移り住んでいたようである。また、同じく文化二年九月脱稿、翌年一月一日に刊行となつた竹田の漢詩集『填詞函譜』に月峰が蘭牡丹図を寄せていることから考えても、上京してすぐより二人は近しくしていたものと想像される。竹田は、文化三年三月頃、儒学者で、詩文や書画も能くした村瀬栲亭に入門。翌年末、塾を去り、豊後竹田に帰国するが、



文化八年、同十一年と上京する。そして、文政六年（一八二三）には文化五年に誕生した長男太一（如仙）を連れて上洛。その時は、双林寺門前南側に僑居したという（文政六年六月五日、伊藤樵溪宛竹田書簡<sup>〔注〕</sup>）。また年明けて、二月十一日に橋本竹下・亀山夢研に宛てた書簡には、次のように記す。

此節京遊所<sup>レ</sup>交、不<sup>レ</sup>過<sup>二</sup>六七輩<sup>一</sup>候、其他一切不<sup>レ</sup>通<sup>二</sup>来  
往<sup>一</sup>候。然猶悶忙、終日ムザ<sup>レ</sup>暮し申候。所謂六七輩  
八頼山陽・小石元瑞・紀春琴・王百谷・物西阜、及僧大  
含・月峰也。  
（『田能村竹田全書』書翰）

文化八年の上京で初めて面会し、その後も親交を深めていた頼山陽を筆頭に、息子太一の師である医師小石元瑞・浦上春琴・小田百谷・物集西阜・雲華上人、そして月峰。竹田が交誼を結んでいた人物はわずか六、七名であったというが、そこに月峰も含まれている。ほどなく二十六日には、太一とともに帰国するが、文政十二年（一八二九）夏、太一は再び石塾へ入る。大坂にいた竹田が息子へ宛てた手紙では

月峰上人・木米老人も、無<sup>レ</sup>延引<sup>二</sup>走調スル事<sup>一</sup>。

（文政二二年六月一日『田能村竹田全書』書翰）

月峰にもすぐに挨拶へ行くよう、促している。

竹田に帰国している間も、竹田と月峰の間では書状などが交わされていた。『竹田文集』<sup>〔注〕</sup>には、文政十一年には「試<sup>二</sup>沙羅双樹林寺僧月峯亮公。所<sup>レ</sup>送双竜古墨。」とある。また、竹田が没する二年前に纏めた先述の『竹田莊師友画録』にも「爾後殆向<sup>二</sup>三紀<sup>一</sup>。猶嗣<sup>二</sup>徽音無<sup>レ</sup>絶矣云。」と、出会ってから三〇年以上にもわたって変わらず交情を深めていたことを記しており、二人の間は竹田が死去するまで続いたものと想像される。

在京中の竹田が、同郷出身の雲華に宛てた書簡が存する。

過刻頼兄一同參申候処、御手牘拝見仕候。紅葉最早七八  
分染尽、来日八難<sup>レ</sup>期、此游不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>同候間、早々御令  
駕可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。此会、上人の口より出候而、御食言八聞  
えぬ事と、頼兄ごとと申候、早々御出可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。月峰  
上人、指支へ八少しも無<sup>二</sup>御座候<sup>一</sup>、以上。

十四日

只今早ク御出奉<sup>レ</sup>待候、妄語戒八不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>候也。

竹田生、拝

含公侍史

箱蓋と詩八、御出之上、頼兄より渡スト云ふ事也。

(文政六年十月十四日『田能村竹田全書』書翰)

(年未詳三月二十三日『賴山陽書翰集』下)

雲華が言い出した紅葉見であるが、肝心の雲華が遅れてしまい、山陽がそれに小言を言っているから、どうぞはやくお出で下さい、という内容である。この時に成った「十月十四日 訪二月峰房。頼・田二兄先在座。」と題した雲華の漢詩があり、紅葉を楽しむ宴が月峰房、すなわち双林寺で行われたことが知られるが、このように、月峰の元には度々人が集った。とくに山陽は、文政十年閏六月二十四日、梁川星巖宛の書簡にも「今日雨晴候て、月峰へ可参」(『賴山陽書翰集』下)とあるように、屢々、月峰を訪ねていた。

山陽は、時には月峰相手に駄々を捏ねるような様をも見せる。

又々申上候。昼之内は御对客にて、御隙有之まじく候へども、夜はもはや宜布と奉存候。只今并菱に居申候。不苦候ハゞ只今御出被下度奉希候。今度、御くさりなされ候ハゞ、以来絶交仕候、鳥渡にてもよろしく候。草々。

三月廿三日夜

三本木頼

双林寺長喜庵様

賴山陽は、安永九年生(一七八〇)、天保三年(一八三二)没、享年五十三歳。月峰は、親子ほども年の離れた賴山陽にも慕われていた。月峰の元に集まるばかりでなく、山陽の家に会することもあった。文政二年十二月一日、田能村竹田に宛てた書簡には、

時二今夕、月峰・百六を呼、此間之缺欠を補候、大分ウマキ物も御座候、来否不可知候へ共、必来申候、兩人対坐食尽も可惜候。先生間隙なれば拳玉奉頼度候。左候へば失礼二類候へども、親交意不三相猜なるべし。

(『賴山陽書翰集』続)

山陽の家で、月峰・木米、そして竹田の三人で宴を催そうと、いうわけである。ほかに、書かれた年は不明であるが、十月一日、月峰・木米に宛てた書簡では、寒蘭が美しく咲いたので、明日の夕方に見に来て欲しいという。二日が不都合であるなら、三日でもよい、とまで言う(年未詳十月一日、『賴山陽書翰集』下)。先の書簡(文政二年十二月一日、竹田宛山陽書簡)にも月峰・木米の兩人は共に呼ばれている

ことから考えて、月峰は青木木米（明和四年（一七七七）生、

天保四年（一八三三）没、六七歳）とも親しく付き合っていたようである。

重九

襄拝復

月峰老上人

（年未詳九月九日『頼山陽書翰集』下）

さて、このように、年配者からも、また年若い人達からも慕われる月峰という人物は、いったいどのような人物であったのだろうか。山陽が橋本竹下に宛てた書簡に（年未詳正月廿四日、『頼山陽書翰集』下）「月峰と申す男は、いつ迄も人の厚誼は不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>ものに候」と言つ。そういう人物であるからこそ、山陽は月峰に対して、一方では遠慮の気持ちも忘れなかつた。文政一二年二月三日、雲華宛書簡では、翌日、月峰亭へ行くにあたり、「小魚御持可<sub>レ</sub>然候、新鮮的之海魚、鱸も妙なるべし。僕も母より差越候妙品あり、持参可<sub>レ</sub>仕。どぶぞ月公に些も心配させぬ様、御申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。豆腐汁だけ、仕てもらふも可也。」（『頼山陽書翰集』下）と言っている。

此方よりこそ御無音仕候。毎度義亮様御尋被<sub>レ</sub>下、今朝は乍<sub>レ</sub>毎御丁寧之御義ども、忝奉<sub>レ</sub>存候。左様候へば、何よりのしな被<sub>レ</sub>掛<sub>二</sub>御心頭<sub>一</sub>、毎夕之肴に困居候て、塩辛計にてもすまぬと申処へ御佳貺、寒厨頓生<sub>二</sub>気色<sub>一</sub>候。万々御厚意、忝奉<sub>レ</sub>存候、然し痛却の義に候。猶拝眉御礼謝可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候。草々頓首。

このように、月峰は度々息子義亮を遣いにやり、酒の肴などを届けさせていた。馬琴も言うように、大雅堂では料理を出しており（『羈旅漫録』）、また『花洛名勝図会』では双林寺の図に「厨」の場所も明記されているのであるから、双林寺や大雅堂は料理屋としても十分に機能を果たしていたのだろう。東山という土地は、その景観のよさから、古来人々が集う場所であつた。そのなかでも双林寺は円山安養寺と同じように、その美観を利用した集客を行つていて、『都名所図会』に「当寺の院々も風景ありて洛陽交游の勝地なり。春秋ともに酣歌の声間断なし。」「『花洛名勝図会』では双林寺の長喜庵、文阿弥（勝林菴）、閑阿弥（発心菴）などをとりあげて「各庭前に風景あり。洛陽遊宴の一勝地にして、四時とも其席に集筵して酣歌する人さらに断る事なく、円山の坊中に亜たりといふべし。」とする。月峰は双林寺のこうした点をもうまく利用し、文人達と交流を深めていたのである。また、当時の京坂の文人達が月峰と繋がりを持つとする理由のひとつに、骨董品の収集を趣味とするといった、好事

を道楽としていることがある。文化十一年十二月七日、浦上春琴宛山陽書簡には「肥後研は如何。月（峰）も何角硯を得たと申居候。」（『頼山陽書翰集』上）<sup>(2)</sup>という。月峰は、鑑賞にたえられるような美しい硯を手に入れ、山陽に自慢したのである。また、文政元年、長崎などを巡った山陽が、現山口県下関、赤間関より月峰に宛てた書簡は、山陽や月峰、春琴等の間で、古美術収集が流行っていたことを伝える。

それはともあれ、何ぞ京のもの共の目玉を引くり返す様のものを獲て帰度と、上碧落・下黄泉・天のさかほこ・石人のいわ穴迄もさがし候へ共、とんとないと云たらひどいものに候。（中略）さぞ春琴などは、すわりながらよきもの共獲はせぬかと、三百里さきから気がせき申候。されども、少々は御目につけ候ものも御座候。（中略）猶々、僕搜「古画器玩」も、自娛之計のみ。京の根性悪ども、彼交易者流と一口に可<sub>レ</sub>申哉と、今から気色あしく候。然し、こんな事は、生涯たへぬもの也。路にて取候金は、ことごとく物を買て、空囊にて帰京致度ものと存じ候へども、ないと来ては困たもの也。金はどぶしてもあまり可<sub>レ</sub>申候。

（文政元年十二月二十四日 『頼山陽書翰集』上）

美しい庭に美味しい酒肴で客人をもてなし、さらには古器で目を楽しませる——それに加えて、月峰は来訪する人々に興味深い話を聞かせた。

ある日、門人の男が蕪村宅を訪ねてみると、家人が留守なのをいいことに、大声をあげ、芝居役者の真似事やっていた、という有名な話（『屠赤瑣瑣録』巻二）を竹田に伝えたのは、その末に「月峯上人の話なり」とあるように月峰である。さらに竹田には、俳諧師五雲の話もする（同）。山陽に「大雅妻玉瀾の母という百合について語ったのも（『百合伝』『頼山陽文集』）また月峰である。画や篆刻のみならず、俳諧も能くし、多くの俳人と知己であった月峰は、書画壇・詩壇・俳壇などの分野を超えて、人間関係を構築してゆき、その結果、様々な話題が、彼を介して多方面に広がっていたのである。

月峰のもとには、在京の者だけでなく、各地から上洛した旅行者も訪ねてきた。文政六年四月二十八日には、福岡から上つてきた大隈言足・伊藤常足が大雅堂を訪ねている。

常足ぬしをともなひ、東山双林寺中月峰上人のもとにあそぶ。其子の義亮、清亮もあひたり。此寺の林泉、さながら深山幽谷のごとくにしていとおもしろし。文人な

どのをりくきたりあそぶところにて、大雅のかける額  
などかゝげたり。

（『大熊言足紀行』 東京大学史料編纂所蔵）

このようなときにも、月峰は恐らく珍しい物を見せ、耳を驚かすような話を聞かせたであろう。竹田や山陽、そして言足などの例を見るにつけても、月峰という人物は、中央から地方への文化伝播の一翼を担っていたと言える。

### 三、月峰主催の新書画展観

月峰を語る上で、忘れてはならないことの一つが、月峰が主催した書画会である。『花洛名勝図会』の長喜菴の項に、「文化の頃より春秋三月二十三日、九月二十三日両度書院の毎間に洛下の書画を展観せり、年々怠らず。その日文人墨客来集して大いに盛なり。」と記されている。皆川淇園「書画展観品目名字録首引」（文化一三年序『淇園文集』前編卷六）によれば、寛政六年八月五日に双林寺で新書画展観が行われたことがわかるが、これと、『花洛名勝図会』にいう月峰主催の長喜庵展観とが同じ性質のものかどうかはわからない。従って、この書画会の起源がいつ頃になるのかは判然としないが、

これから紹介する数通の山陽書簡によれば、展観の開催された日にちが春秋三月二十三日、九月二十三日というのは正しい。例えば、文政三年九月二十三日、頼山陽が雲華に宛てた書簡をみると

今日例之双林展観へ参候処、御弟子画像に邂逅、明日大  
有兄御西帰と承候ゆへ、附此双字候。

（文政三年九月廿三日『頼山陽書翰集』上）

実際、このように九月二十三日に双林寺で展観が開かれている。

山陽の書簡のなかには、このほかにも双林寺で開かれた展観について話題になっているものが多く残されている。そのうち幾つかをここに挙げながら、展観の様子を探ってみる。

まず、展観は、いわゆる新書画展観で、山陽自身も勿論出品していた。年代未詳であるが、三月二十三日、月峰に宛てた書簡は、芝居言葉を用いただけだった表現となっている。

口上

例の場合ふさげもの差出申候。立役、今度の芸に、はじめ  
て女形をやり申候、棧敷受如何可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉、兎角座元の

御引まわしを願上候。日晡の比、又々拝顔、かの牡丹餅を相たのしみ申候。以上。

三月廿三日

尚々、百銅相添申候。大幅にはやすく候へども、御なじみ甲斐に御受納可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

廿三日五半過

双林寺

長喜庵様

頼

掛物一幅、百銅添

(年未詳三月二十三日 『頼山陽書翰集』 下)

「例の場合さげもの」とは「掛物一幅」で、これを月峰に届ける折に付した書簡である。内容から推察するに、いつもとは多少違つた趣向のものを出品するのであろう。「棧敷受」すなわち客受けを気にしている。会場には、「日晡」、夕方頃、参上すること。また、興味深いのは、「百銅」を添えていることで、これはおそらく出品料である。次に紹介する書簡でも、出品料について言及している。

…然八明朝は例の御芝居、青田同様之場ふさげ為持上申候。其上、対幅二て、介石と云芸者つれて参申候、忝

人前出さねばならぬ筈之所、吾人前より八上<sub>不<sub>レ</sub>申候、手打連中之かほと云うぬばねなれ共、よろしく奉<sub>レ</sub>希候。はりつけるか、ぬいつけて上<sub>可<sub>レ</sub>申筈なれ共、巻てしはより申候故、其儘にて上申候、御面倒之至なれ共、よろしく位置奉<sub>レ</sub>頼候。明晡時拜面参可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候。蔵人君も帰京、御同伴可<sub>レ</sub>仕と奉<sub>レ</sub>存候。其節八、例之牡丹餅、相楽申候、是八青田棧敷へ茶・たばこを出させる心也、御一笑。</sub></sub>

九月廿二日夜

人頼二て上申候、明早朝相達可<sub>レ</sub>申も難<sub>レ</sub>計候。

双林寺長喜庵

月峰上人

頼徳太郎拝

吉軸添

(年未詳九月廿二日 『頼山陽書翰集』 続)

介石とは、野呂介石(延享四年(一七四七)一月二十日生、文政十一年(一八二八)三月十四日没、八十二歳)。和歌山藩士で画も能くする。池大雅の門下だった時期もある。その介石との対幅を出品する山陽は、本来なら二人分の出品料を払わなければならないが、一人分しか払わないという。「手打連中」とは、歌舞伎用語で、顔見世狂言の時、劇の途中で

立つて褒め言葉を述べ、手を打つ鼻屑の連中のことをいう。つまり、展観の後援者、関係者だから、大目に見てくれ、というわけである。また寄せられた作品は表装もしていないらしい。展観は翌朝には始まるのだから、主催者月峰の苦勞がしのばれる。前掲の書簡にも、この書簡と同じく「牡丹餅」を楽しみにしているとあるのは、展観で必ず振舞われる茶菓なのか、はたまた料理屋大雅堂や双林寺の名物であったのか。さて、「手打連中」である山陽は、自身が出品するだけでなく、展示作品を集めることにも一役買っていた。

一緊要事あり、鵬目と那波に、展観に御出あれよと勸置候。鵬は手本書て進じ候。もはや期迫申候、未見候如何。ちと御促し可被下候。此義可申上と、態走樵青候。(中略)明日・明後日ノ内に御越と被仰可被下候。

(年未詳九月廿日小石元瑞宛『頼山陽書翰集』下)

小石元瑞に宛てた山陽書簡によると、山陽は物集西阜に手本まで用意していたらしい。この展観に実際、何点程の作品が寄せられたのかは分からないが、山陽の世代のみならず、更にその門下・弟子など若手からも広く集めていたのかもしれ

ない。先に挙げた文政二年九月二十三日雲華宛書簡にも「御弟子画像に邂逅、明日大有兄御西帰と承候ゆへ」とある。

また、長喜庵で行われた展観にはこのように多くの人々が出入りしたため、展示を楽しむという本来の目的のみならず、情報交換の場の役割も果たしていた。関係者の動向について知ることができる場であることは、これまでの書簡でも知られるが、そのほか、新作を取り上げ、その良し悪し、評判を語る場でもあった。

初も御無沙汰候と云も、巻出来候はゞ、其節と存候ての事、所が、表具屋大隙入り、出来候て直にと存候所、箱なければ損じ可申と存候て、鼎に相談いたし候所、鼎申すには、折角箱もさせての御頼と申候故、させ候所、是に又十日程も延引。大方貴錫東飛と、行違ひにはなるまじやとも存候へ共、御約束にまかせ、豊前へ差出し申候。初も是れには骨折り申候て、京の評判も一統よろしく候(自注一箱出来の日、月峰長喜庵展観の日にて出し申候)。

(文政三年三月廿七日雲華宛山陽書簡

新選 山陽書翰集)

そして、最も重視したいのは、月峰が開催した新書画展観は、新たな人間関係を生みだす場であったことである。

例えば、『竹田荘師友画録』巻上の東洋の項目を見ると、「予於「東山月峯上人書画会席間「相識」とある。画もよくした月峰の知己として参加していた東洋と、遠く九州竹田から上京してきた竹田とを結びつけたのは、双林寺での新書画展観であった。

#### おわりに

洛東双林寺三四世の住職、月峰の活動を、交誼を結んだ二人の人物——ともに書画を愛好する趣味人であり、遠い土地から上京した年少者——の残した書簡や詩文から拾い出し、考えてきた。それらは文化・文政期のものが殆どで、月峰の活動といっても、晩年の一時期、特定の範囲のものしかとりあげることができなかったが、それでもなお、月峰の存在の特異さを垣間見ることができた。

東山は、京の人々が好む遊興の場であり、また文人墨客がその佳景、歴史にひかれて集ったり、住家を移したりするような、いわば文化的土地空間であった。京都のなかでも、いささか異質なこの地において、月峰はさまざまな人々を繋ぐ

役割を果たしていた。それは東山という美景を利用したものであったり、双林寺内の趣向をこらした美しい庭、さらには大雅堂などの料理屋といった数々の利点をいかしたものでもあつた。月峰自身が池大雅の弟子であつたこと、また当時、大雅の画が流行していたこと、これも月峰という人に掛替えない価値を与えただろうことは想像に難くない。加えて、その面倒見のよさ、義理堅さといった、月峰の性格も、彼の行動や活動を支えたことであろう。

ともあれ、双林寺の僧侶である月峰は、大雅風を伝える画家として、また古器物を愛好する好事家として、展観の開催者として、本稿では触れなかったが俳諧師として、その人脈を駆使し、近世後期の京都東山に一つの文化サロンを形成していた。それは展観などの文化的活動であつたり、花見・紅葉狩り、またはそう謳つた単なる宴であつたりと、多様な理由付けがなされたが、確かに機能し、重要な役割を果たしていた。新たな人脈を作る場であるだけでなく、作品の品評や情報交換、その結果、新たに創出されてゆく作品に影響を及ぼしたことは明らかである。更に、そのサロンの影響力は、東山という場に留まらず、地方へ及び、文化伝播にも役立ついたのである。

冒頭で述べたように、月峰は俳事も盛んにし、また画者と



しても活躍していた。本稿では、山陽と竹田を軸に主にその晩年の交友の様を確認してきたが、月峰のサロンは俳壇や画壇とも関連していることは明らかである。月峰について、今回取り上げることができなかった壮年期の活動や、俳壇との関わり、画業などについては、改めて稿をなすことにしたい。

注

注1 明治期の名勝地公園化計画とその影響については、加藤哲弘・中山理・並木誠士編『東山ノ京都風景論』(二〇〇六年、昭和堂)に詳しい。

注2 月峰挿画についていくつか例を挙げると、俳書では紫暁編『曙草紙』(寛政三年(一七九二)刊)、常盤の香『(同十一年刊)、夢の猪名野』(享和元年(二八〇二)刊)、一無庵編『高名詞画』(同三年)、定雅編『しなえらび』(寛政四年)、露一つ『(刊年不明)、古かめ』(同)、一枚摺では『定雅席上探題月峰画松下人物図』(俳諧一枚摺)平成三年、(財)柿衛文庫)など。

注3 富田志津子著『二条家俳諧資料と研究』(研究叢書二四三、一九九九年、和泉書院)参照。

注4 (一)内の月峰年齢は『大人名辞典』の享年より逆算したもので、以下同。

注5 なお、月峰の墓は、その息子義亮、清亮のものとともに、今も双林寺の墓地に存する。

注6 『近世人名録集成』第四卷(昭和五十一年、晚誠社)所収。引用に際して、句読点は私に付した。

注7 徳富蘇峰監修・木崎好尚編『田能村竹田全書』文集・遺著(昭和十一年、帝国地方行政学会)所収。

注8 『新修京都叢書』巻一(臨川書店)所収。

注9 紫水文庫(昭和一四年)。濁点は私に付した。

注10 九州大学文学部図書室相見文庫(和・103)、東京芸術大学附属図書館協本文庫(R720・6-12)、刈谷市立図書館村上文庫の三点が伝存する。

注11 池大雅については、森銃三氏「池大雅」「池大雅家譜」「大雅堂遺事」「大雅遺聞」(森銃三著作集)第三巻 一九八八年刊、中央公論社)に詳しい。また、月峰について、大雅にかかわるもの、とりわけ大雅堂に係る事柄は、相見香雨氏の書かれた「池大雅」(相見香雨集)二 日本書誌学大系四五 一九八六年、青裳堂書店)の「大雅没後の大雅堂」とその内容が重なる箇所があるが、これらには参考資料名が明示されていないのでそれを補う意味と、月峰を語る上で省略することは難しいために、あえて重複を恐れず記した。

注12 『詩集 日本漢詩』巻六所収。以下同。

注13 『田能村竹田全書』文集・遺著所収。

注14 『田能村竹田全書』文集・遺著所収。

注15 『淇園詩文集』(近世儒家文集集成九、昭和六一年、ペリカン社)所収。

注16 『日本随筆大成』一期一巻所収。

注17 日本古典文学大系『上田秋成集』(岩波書店)所収。

注18 『新修京都叢書』巻一七・二二巻所収。

注19 『田能村竹田全書』文集・遺著所収。

注20 徳富蘇峰監修・木崎好尚編『田能村竹田全書』書翰(昭和九一年、帝国地方行政学会)

注21 『田能村竹田全書』文集・遺著所収。

注22 徳富蘇峰・木崎好尚・光吉澆華共編『頼山陽書翰集』下（昭和二年、民友社）

注23 徳富蘇峰・木崎好尚共編『頼山陽書翰集』続（昭和四年、民友社）

注24 徳富蘇峰・木崎好尚・光吉澆華共編『頼山陽書翰集』上（昭和二年、民友社）

注25 木崎好尚著『新選 山陽書翰集』（昭和十一年、章華社）

本稿は、平成十八年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（たなべなほこ・日本学術振興会特別研究員）